

# MIBCによる日中ビジネス交流 —コロナ禍を乗り越えて

日中国交正常化50年を迎えて

MIBCセンター理事長 西原茂樹



今年は、日中国交正常化50周年を迎えます。

本来なら今頃は北京冬季オリンピックの開催で盛り上がっている時期ですが、コロナは経済や交流と合わせてすべてを凍結させてしまっています。

そんな中で、「コロナ禍を乗り越えて」どう考え、何をしていくべきかを、地方で暮らす、日中交流に携わってきた一人としてお話しします。

静岡駅から新幹線で大阪に行き、伊丹空港から上海虹桥空港に到着しました。もちろん浦東空港はできていませんし、虹桥空港もその頃は小さな地方空港でした。そこからバスに乗り込んで、浙江省の省都杭州に向かいます。

当時は高速道路もなく田舎の凸凹道をバスに揺られました。

7時間かけて到着した杭州市は真っ暗

2年日中国交正常化20年となる年の秋でした。

友好提携を結ぶ浙江省とは10周年となり、私は浙江省政府主催の式典に出席する代表団の一員として浙江省へ向かいました。

静岡駅から新幹線で大阪に行き、伊丹空港から上海虹桥空港に到着しました。もちろん浦東空港はできていませんし、虹桥空港もその頃は小さな地方空港でした。そこからバスに乗り込んで、浙江省の省都杭州に向かいます。

当時は高速道路もなく田舎の凸凹道をバスに揺られました。

7時間かけて到着した杭州市は真っ暗

闇にぼつぼつと灯が見える程度で、田舎の省都に見えました。

友好提携10周年を記念して、静岡県から3階建てのホテルを寄付しました。

最近、当時の両省県の担当者から思い出話として聴いたところによりますと、静岡県側は最初に「日本の最高水準のパソコン」を百合寄贈しようと提案しましたが、中国側は「いつまでも残るものがない」となり、結局ホテル（友好会館）となったそうです。

かなり高いプレゼントになりましたが、現在も使われている施設ですのですぐ陳腐化したパソコンなどよりもずっと価値があるものだったと、当時の関係者の

## 静岡県と浙江省の友好交流10周年目の交流

私が最初に中国を訪問したのは1999

労苦に感謝して います。

美しい西湖はその後何十回と訪問しました。近くの龍井茶で有名な龍井村など、浙江省そして杭州市にはいつも心が安らぐ素敵な場所がたくさんあります。

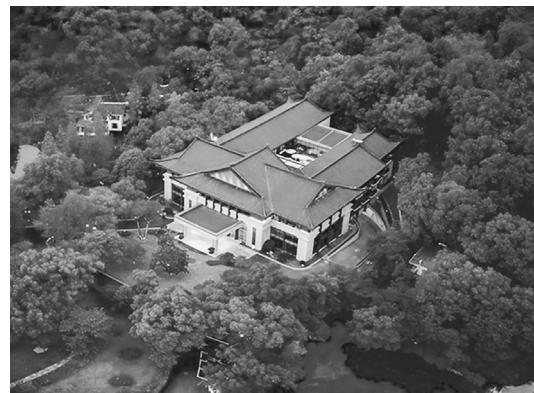
### ヤオハン和田会長との出会い

この時は帰りに香港に寄りました。ビクトリアピークにそびえ立つ迎賓館「スカイハイ」で待っていたのは、静岡県熱海市が発祥のヤオハンの和田一夫会長でした。ヤオハンは上海や北京にデパートを建設しようとしていました。迎賓館の本社にあるM&Aの大会議場を見た後で、二人でこんな話をしました。

私は「和田さん！ 中国に進出するこ

とはその後何十回と訪問しました。近くの龍井茶で有名な龍井村など、浙江省そして杭州市にはいつも心

が安らぐ素敵な場所がたくさんあります。



寄贈された花家山莊（杭州市）

彼はにこやかな表情で「西原さん！ 戦争に負けた日本が豊かになつていて、戦争で勝った中国は貧しい。日本は戦争で中国に迷惑をかけたから、経済で応援して豊かになってほしい。中国が、よこせ！」といつたら全部さしだしますよ！」と真顔で答えました。

その後1995年に、ヤオハンが上海浦東にデパートを開業した時に、案内をいただいて見学に行

きました。すごいお客さんだったにもかかわらず、誰も紙袋を持つていませんでした。買っていない、見ているだけのお客さんに「大丈夫だろうか！」と心配をしました。

当時、静岡県はシンガポールに事務所があり、次のアジア事務所設置を香港に考えていました。

私は「ヤオハンが進出する経済の中心地、上海が適切だ」と知事に要望し実現しましたが、残念なことに静岡県上海事務所設置3か月後にヤオハンは破綻しました。

静岡県の石川嘉延知事や県議会議長の挨拶の後に、いわゆる「井戸を掘った人」として、85歳でもかくしゃくとした静岡県日中友好協議会の井上光一理事長が力を込めた挨拶をしました。要約すると以下的内容でした。

「交流が始まつた古いいきさつを知つ

ている人が減ってきた！ 22年前の1980年、山本敬三郎知事と浙江省にやつ

環境といった様々なテーマで中国を訪問していました。

今でも続く中国との深い交流の原点は、2002年浙江省への友好提携20周年記念訪問にありました。

その年の10月、静岡県訪問団は、2便に分かれて名古屋空港から浙江省の省都杭州にできたばかりの蕭山空港に降り立ちました。800人を超す静岡県からの訪問団を浙江省政府は大変歓迎してくれました。

杭州劇院で行われた記念式典には、11月から省書記に就任する習近平（現最高指導者）代理省長が挨拶をし、「もっと広い分野での協力を両省県の間でしていくことに期待をもっている。青少年の交流をさらに強力に増やして、中の友好の後継ぎを養成していくことが大切」と結びました。

静岡県の石川嘉延知事や県議会議長の挨拶の後に、いわゆる「井戸を掘った人」として、85歳でもかくしゃくとした静岡県日中友好協議会の井上光一理事長が力を込めた挨拶をしました。要約すると以下の内容でした。

「交流が始まつた古いいきさつを知つ

ている人が減ってきた！ 22年前の1980年、山本敬三郎知事と浙江省にやつ

てきた。温州みかんとお茶の故郷という単純な動機だったが、来て驚いた。美しい西湖や産業、気候風土など静岡県と似ている。早々とここしかないと決めた。改革開放が始まったころで、相互理解がなかなかうまくいかなかつた。忍耐でやつた。氣も使つた。当時の沈省長さんが『晩婚でやろう』と言つた。私は『どうせなら早いほうがいい』と主張した。その時、省長さんが『静岡県はお荷物を持つことになつて大変だよ』と言つたが、『それでもかまわない。提携は永久です』と言つて進めた。現にいまや中国で冠たる浙江省になつた。世界でも冠たる浙江省になつた。さらなる友好提携の促進をしたい」と、静岡県側からの熱いメッセージを送りました。

大会の挨拶からうかがえた姿勢は、静岡県はどのような支援や交流をしたかといふ過去の話題に対して、浙江省はこれから発展と友好促進に触れていました。浙江省にとって静岡は有利かどうか、友達として経済産業文化教育で交流して省のためになるか、その視点が大きいと感じました。

私は帰りの飛行機の中で、熱い挨拶をした井上日中友好協議会理事長から、「西原さん、私の後を継いで若いあなたた

方が、青少年教育交流と経済交流で中国浙江省との交流を続けてください」とタスキを受け取りました。それが、県議会議員や市長時代を通じて一貫して日中関係の地方レベルでの、教育と経済（MIBC）構築を目指してきた原点です。

## 中国の成長と交流の変化

日中国交正常化30周年のこの年を前後して、日本と中国との新しい関係が始まろうとしていました。

1990年代の中国が製造業で躍進し、大成長の勢いは中国国内の科学技術と大衆消費を大きく押し上げ、日本を追い抜き追い越す勢いをもつていきました。

2001年に実現したWTOへの加盟によつて、日本と中国の貿易摩擦が話題となり、2002年には、小泉純一郎首相（当時）が訪中し「日中経済パートナーシップ協議」の場が設置されたように、

経済の交流は活発化し、2007年に日本最大の貿易相手国は米国に代わって中国になり、2010年には中国のGDPは日本のそれを上回り、中国はアメリカに次ぐ世界第二の経済大国となりました。

一方、日中留学生人材育成支援事業が

始まり、シニア海外ボランティア派遣や日中青少年友好交流など、青少年を中心とした「未来志向の交流促進」が図られるようになったのもこの時期でした。

特に、2008年の北京オリンピック、2010年の上海万博など中国が紹介される機会が多くなり訪中観光客の増加が期待されました。政治的な対立もあり、経済の交流が進む一方で人的交流は進みませんでした。逆に、大成長する中国からは訪日旅行者が増え続けています。

歓迎されることですが、相互理解のためには、日本からの訪中旅行者の増加を図ることも急務です。外交面での安定した日中関係を取り戻す有効策は見いだせていませんが、民間・企業レベル、地方政府レベルでの交流は、コロナ後に積極的に進めていくべきだと考えます。

## アフターコロナの交流の課題

コロナ後に向けての日中交流の切り口として簡潔に3点の提案をします。

1つ目が、地球温暖化防止と環境インベーションです。

2つ目が、健康と医療と食や観光を統合するスポーツイノベーションです。

3つ目が、経済における地方間交流の共創イノベーションです。

先日の講演では、環境やスポーツについても説明しましたが、誌面の関係で経済交流に絞ってお話しします。

## 経済における地方間交流の共創イノベーション

私は、新たな「地方間交流で共創を！」と、中国政府や地方政府に「日本と中国の地方政府間や中小企業間で協働して創造的に製品やサービスで交流していきましょう！」と、M I J B C を呼びかけてきました。

なぜ静岡県の私たちがこんな提案をするようになったのか、経緯を少し話します。富士山静岡空港が開港し、しばらくすると中国からの観光客が急増しました。私は空港立地市長でもありましたし、空港会社に資本参加していましたから常に状況を把握していました。

廊下にうずたかく積まれるお土産品は飛ぶように売れました。さらに、炊飯器や便座まで売されました。中国でも売られているだろうに「そうか、彼らは日本製が良いんだ！」と気づ

きました。

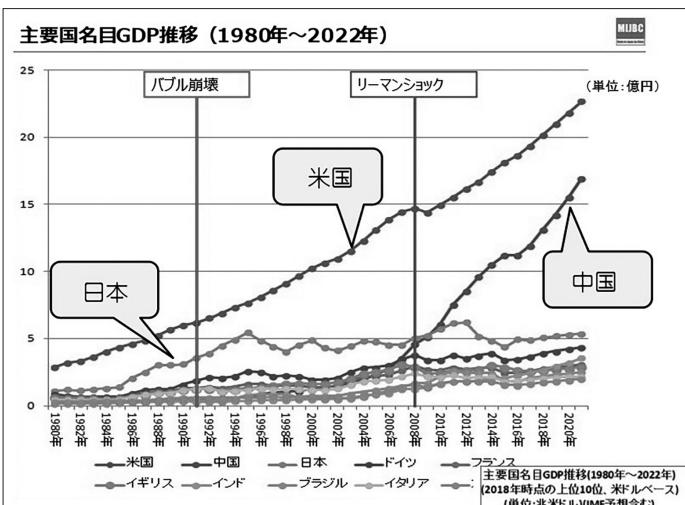
当時は、今もそうですが、静岡県の製造品出荷額はピーク時に比べて落ち始めています。製造拠点としての日本の地位はどんどん低下していました。

静岡県内は自動車産業が主力ですが、海外移転がどんどん進んでいます。全国で調子が良いのは、愛知県だけで後の県は押しながら低下傾向です。アメリカや

中国のGDPは増えているのに、日本は全くこの30年低迷しています。成長しています。世界は、製造業以外の、ITや金融や不動産が経済を引っ張っています。製造業依存からの脱却には、外に向けて、あるいは外と組んでいくことだろうと、この中国人の爆買いに注目しました。

日本は、製造業以外の、ITや金融や不動産が経済を引っ張っています。製造業依存からの脱却には、外に向けて、あるいは外と組んでいくことだろうと、この中国人の爆買いに注目しました。當時は安倍政権が、石破茂地方創生担当大臣による地方創生が高らかに呼ばれていました。そこで、牧之原市は「まち・ひと・しごと創生総合戦略」で、石破大臣から「国より先にやっている」と評価されました。そこで地方創生のユニークな案をして予算を貰いましょうとなつて、ならばとのM I J B C をとスタートさせました。

経済産業省は、當時、対日投資の促進を閣議決定して進めていますが、なかなか進んでいませんでした。2012年目標で35兆円というものでしたが、2012年段階で半分ほどでした。そこで地方創生でも「外国企業の地方への対内直接投資の促進」とうたって努力していました。私たちがM I J B C を始めて1年ほどたった時、経済産業省の課長が訪ねてきました。経済産業省でも地方創生で事業を起しましたが、インバウンドは熱心だが、投資促進を掲げて地方創生をやつ



きました。経済産業省でも地方創生で事業を起しましたが、インバウンドは熱心だが、投資促進を掲げて地方創生をやつ

現在全国で25の自治体が対日直接投資サポートプログラムに挑戦しているそうですし、国家目標の対日投資35兆円も見えているそうです。牧之原がやつてきたことは正しかつたということです。

静岡県牧之原市の挑戦は東京ではなくて、地方！大企業ではなくて中小企業！日本の方や中小企業が元気を取り戻すために、中国の皆さん之力を借りようということです。

Σ—→ (Made in Japan by China)



一言で言うと、日本と中国の共同ものづくり・共同研究開発です。

日本にとつては地方創生、中國にとつてはブランドです。

豊かな資金と14億人という販路をもった（さらに付け加えればやる気のある）中国と協力して、長年の生産技術とノウハウをもつた日本で生産や開発をやり、日中共同の製品やサービスを創出し、「M·I·J·B·C」ブランドで世界市場に展開していくことです。

最近まで中国の中小企業はこんなことが困っていました。

産業の高度化がまだ進んでいない。製品やサービスの品質向

上が課題だ。省エネルギーなど環境問題への対応が欲しい。企業経営の長寿化を目指したい。こういった中国企業が抱える構造的な課題、将来の問題について、解決の鍵を握るのが日本の技術ノウハウです。

中国と日本の「共同ものづくり」を進めることで、中国企業が抱える課題を解決し、世界市場をターゲットにしたビジネスの展開ができる。それはそのまま、

中国国内での製品生産と中国産業の高度化につながります。

日本には多彩な先進技術があります。日本の研究開発型企業と先進技術を利用することによって、共同開発を行ってまいります。

した製品の共同開発を日本で行います。日本には付加価値の高い製品と信頼を生み出す品質管理技術があります。「日

「本製」の高品質とブランド力を生かした  
製品・サービスを共同開発できます。

日本には世界最高水準の環境やエネルギー技術があります。新エネルギー技術や廃棄物処理・水処理などの共同開発ができます。

日本には百年企業がたくさんあります。企業を継続させ発展させる経営技術は、共同ものづくりを通じて日本の経営、人材教育などの経営技術を学べます。

日本に生産拠点を置くメリットですが、中国・グローバル市場でのブランド力がつくこと、日本国内の先進技術企業との連携が可能となること、日本から海外移転が難しい技術経営ノウハウが習得できること、日本国内の評議會、支行者、渠

ること、日本国内の研究者、技術者、熟練工などと連携できることがあります。それら資源を最大限に活用したものづくりが可能となります。

M I J B C は日本の中小企業にとっても魅力的です。

中国企業に悩みがあります。本の中小企業にも悩みがあります。人口が減ってき物を作つても売れない時代になつてきました。経済のグローバル化といわれていますが、海外進出のノウハウもないし、リスク対応もできそうもありません。

成長産業への事業転換をしたいが経営資源が不足しています。地域の経済産業力が低下して地盤沈下していますが、東京と大企業だけが良い……何とかならないか！ という課題解決のための新たなアプローチとしてM I J B Cの考え方が必要ではないでしょうか。あと30年すると日本の人口は9千万人です。国内市場が縮小する一方で中国をはじめとしたアジア市場は急拡大しています。中国などアジア市場をターゲットとし

たとえば、産業構造の変化に対応したいが……経営資源が不足している！といった課題には、中国投資家から新ビジネス創出のための経営資源を獲得することができます。

M I J B Cプラットホームは中国側投資により設置します。投資・事業支援の窓口ですが、

本の中小企業にも悩みがあります。人口が減つてき物を作つても売れない時代になつてきました。経済のグローバル化といわれていますが、海外進出のノウハウもないし、リスク対応もできそうもありません。

日本企業(県内企業)が抱える課題	
静岡県の企業が抱える課題	
人口減少社会の到来 国内需要の減少により、ものつくとも売れない時代へ	
経済のグローバル化への対応 海外進出ノウハウの不足、為替・政治などの海外リスクへの対応	
成長産業分野への進出 産業構造の変化に対応した事業転換のための経営資源の不足	
地域の経済力・産業力の地盤沈下 東京(首都圏)など大都市圏への経済・産業の一極集中	

### 課題解決のための新たなアプローチ、MIJBC

たビジネスを日中共同開発すべきです。一方、中国からの企業撤退も増えています。環境変化、人材不足、商習慣の違い、人件費高騰などが原因です。さらに、日本中の政治的な課題もあり、日本中小企業が出て行きにくい状況にもあります。

そんな時に、生産・開発・サービス拠点を日本国内に置き、中国進出リスクなしで中国市場のノウハウを得るM I J B Cは魅力です。

一昨年浙江省寧波市で開催された越境ECは寧波M I J B Cチームのプラットホームによって運営されました。日本国内での設置を想定していましたが、越境ECということで、中国国内への足がかりとしての拠点となると考えています。

M I J B Cセンターは、日中双方の、国や自治体に対する政策交渉、企業の立地協力、中国企業投資家

これは複数の設置を考えています。

### M I J B Cの具体的取り組み



中国企業の皆さんにその中から「中国にはない技術や商品・サービス」を見つけてもらうのです。また日本式経営も、話ではなく現場に入つてみてもらうこと、そのあとで実際に研修を受けてもらうこともやってい

ます。特に日本の企業を現場で見て知つてもらうことはとても重要です。

中国企業の皆さんにその中から「中国にはない技術や商品・サービス」を見つけてもらうのです。また日本式経営も、話ではなく現

ます。ITロボット、トヨタ生産方式、防災環境教育など日本ならではの企業研究から日本の伝統文化まで、夜は市長や市の職員や商工会関係者を入れた懇親会をやることもあります。

人的ネットワークに負うところが大きいです。永年中国との交流を推進してきた日中友好協会、私が県議会や市長を通じて培ってきた人脉と、フル活用します。牧之原市は5万人と小さな市ですが、M I J B C 事業をスタートさせた平成26年から中国企業や政府関係者の訪問はぐんと増えています。

もともと富士山静岡空港がありましたがのでインバウンドの誘致には力を入れていましたが、対象は修学旅行や観光でした。それが企業・投資家向けにPRをしてからはそちらの訪問が増えてきました。コロナ前3年は静岡市・焼津市・藤枝市・島田市・牧之原市など5市2町の連携中枢都市圏の事業となり全体での受け入れになつてきましたが、中心になつているのは依然牧之原市です。

私たちは最初に中国国内で、中国企業・投資機関・商務部・地方政府を回りM I J B Cを説明しました。最初から日本で言つても取り合つてもらえないだろうと思つていました。

そこで対日投資の促進を説明し訴えました。アリババ本社にも行きました。中國大使館に働きかけて、静岡県の県議会議員や市長を招聘していただき、深圳や上海の最先端の企業を視察しました。飛躍的に成長している現在の中国を、地方政治のトップに知つてもらうことは重要と考えたからです。B Y Dの自動車工場をすべて見せてもらいました。同行したあるカーメーカーの技術トップが「わが社では工場をこうして見せない。これほどまでにすべてをオープンにしてイノベーションを図っているのに驚いた。これは学びたい！」と驚嘆しました。

平均年齢が27歳と言うCtrip（携程旅行網）に見るよう、60代の視察団に対応するのが30歳以下という中国パワーもしっかり知つてもらいました。

私たちが中国へ出て行くことによつて興味をもつた中国政府企業の皆さんが続々牧之原市・静岡県にやってくるようになりました。

M I J B C は、中国から日本に投資を呼び込んで、地方創生と中国との友好交流を図ろうとするものです。

中国と日本が協力して、地方創生ができ、経済と雇用創出の基礎エネルギーになります。

日本側にとって中国進出リスクなく、中国市場のノウハウを習得し販路拡大ができます！

それらによつて、日中関係の友好の向上、交流促進が図れます！

地方の経済交流から、小さいけれども中関係の改善も図られるはずです。

中国の皆さんにとっても、日中共同ものづくり・共同研究開発プロジェクト「M I J B C」は、中国企業の課題解決と、中国経済の構造改革や発展に貢献するはずです。

すでに日本は中国政府が提唱する「一

ら矢崎部品ものづくりセンターを視察して、新幹線で帰られましたが帰り際に「西原市長！必ず皆を連れてきます！」と約束して帰りました。それから半年後、本当に彼は30人近い選りすぐりのメンバーを引き連れて牧之原市にやってきました。

## M I J B C の展望

中国政府のシンクタンクである国家發展改革委員会。当時の曹主任は一度数人を連れてお忍びでやってきました。11月の終わりで、駿河湾越しに雪をかぶった富士山がきれいで感動していました。M I J B C の説明を1時間ほど受けてか

帶一路」の一翼を担う立場にいると思します。

好きなか嫌いかを通り越してすでに経済的には切っても切れない関係にある日中です。

日米関係の重要性から政治的には難しいテーマでも、経済や地方政府は積極的に、M I J B Cあるいは日中共創という概念でもって世界に打って出ていくことは大事だと考えます。

では今私たちは何をするべきか！ そこのことを具体的に提案して終わります。

30年にわたって中国を見続けてきた立場から言いますと、中国は大変化を遂げているから、どこかの断片を切り取って評価できないと思います。

「中国へ行ったことがあります」「いつですか？」「万里の長城、桂林、上海、まだ人民服でした」なんて話から、「自転車だらけでした」「バイクだらけでした」から「昨年行きましたが、支払いは全部携帯で、こちらは紙幣で困りました」まで、中国への認識は様々です。

そして一番欠けているのが、現在の中國を知らないということです。私は積極的に若者を中国へ連れて行こうとしています

現在の中国を見て欲しい！ そのため

には交流をどんどんして欲しい。そのための努力は私たちがやりましょうと言っています。今は全くコロナと対中関係の悪化で見向きもされない状況ですが、その訴えの灯を消さないことだと思っていきます。

やろうと！ という積極的な気持ちが重要です。

中国人にはその意欲がありますが、日本人にはそれが欠けています。首長さんがトップセールスをしてくださいとお願いしています。

日本の長い伝統を持つ地方都市、そこに息づく中小企業の匠の技を見に来てもらいましょう。健康・医療も食や伝統文化や自然まで含めて観光もすべてです。

もともと、漢字・仏教からコメも味噌もお茶も、さらには建築・工業技術すべて中国から学びました。

今年は、日中国交正常化50周年です。静岡県にとっては、浙江省との友好提携40周年です。

節目の年の年頭に当たってこんな思いを共有できましたらうれしいです。  
(2021年12月6日・公開講演会)

### 筆者略歴（にしほり　しげき）

前・牧之原市長（静岡県）。金沢大学工学部土木工学科卒業。町會議員、県會議員を経て、牧之原市長（3期、平成29年まで）。この間、地元・牧之原市に富士山静岡空港を誘致、中国直行便を開設。現在、M I J B C センター理事長。

漢字文化圏の「日中」が共創すれば、魅力的な世界展開もできるはずです。

中国の科学技術や経済の進展を見ると、今後彼らがいつまで日本に関心と興味を

もってくれるかどうかはわかりません。

しかし、お隣の超大国として、いかに付き合っていくかという課題は日本にとって大変重要です。

政府に任せるのではなく、幾千万という両国の人々の交流の積み重ねが重要です。

日本で冷凍保存された中国の製品・技術やサービスが、日本にたくさんあるはずです。

もつてくれるかどうかはわかりません。しかし、お隣の超大国として、いかに付き合っていくかという課題は日本にとって大変重要です。

政府に任せることではなく、幾千万とい

う両国の人々の交流の積み重ねが重要で